

元幕臣の英語教師：川路寛堂のこと

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

37

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

1990-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003205>

元幕臣の
英語教師

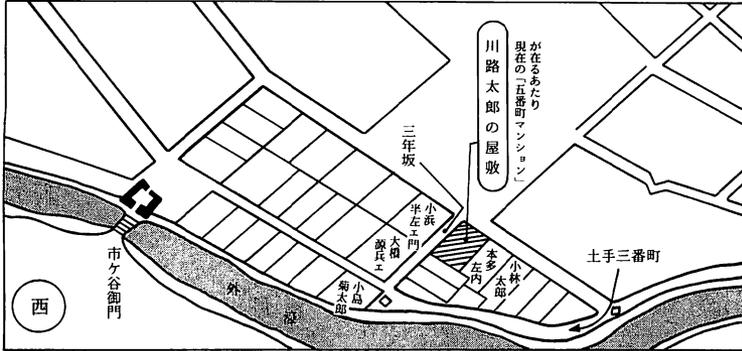
川路寛堂のこと

宮 永 孝

慶応四年（明治元年）六月二十五日（一八六六・八・一三）のことである。横浜港にイギリス船「ハーマン」号（一、九七〇トン）^①が到着し、外国人乗客と共に二十三名のサムライが舷梯（タラップ）を降り、やがて舳に乗って波止場に向った。

二十三名のサムライの一人は、英仏蘭国に派遣された幕府の留学生らであり、徳川幕府倒壊に伴ない、急遽帰国したものであった。皆頭をざん切りにしていたから、官軍や浪士らの注目を引いてはいかがかと気づかい、一同つけまげ^②などして江戸に入らねばならなかった。

この一団の中に川路太郎（当時は二十四歳）という若きサムライがいた。慶応二年十月二十五日（一八六六・一・二・一）、幕命を奉じ十三名の仲間と共にイギリスに向けて横浜を発し、わずか一年半ほどのロンドン留学を終えて、この日帰国したのである。やがて太郎は江戸飯田橋（もの）木坂上の屋敷（現在の五番町十二の六、「五番町マンション」があるあたり）の玄関に立つて案内を乞うと、わが邸は寂^{せま}として声なし、森閑としている。やがて家の奥から出て来たのは、一人の老尼であった。それは髪を剃った祖母（佐登^{さと}）の変わった姿であった。太郎はその姿を見て、思わず流涕^{りゅうたい}久しうした。祖父の聖謨（一八〇一〜一八六八、勘定奉行・外国奉行等を歴任）は、この年の三月十五日――



安政東都 番町大絵画より
再板

江戸城が官軍に明け渡された翌日——邸内の隠居部屋で自刃して果てたのであった。享年七十二歳であった。

太郎は弘化元年（一八四四）十二月二十一日、聖謨の嫡男弥吉彰常の長男として鶴木坂上の川路邸で生まれた。母は幕臣根本善左衛門玄之の女しげである。太郎が三歳のとき、父彰常は二十一歳を一期に病死した。ときに祖父聖謨は奈良に在勤中であり、太郎の母しげは実家に帰されたため、太郎は叔父井上清直（信濃守）（一八〇九—一八六七、聖謨の実弟、軍艦・外国奉行等を歴任）の家で育てられ、八歳のとき川路家に戻った。太郎は両親の愛情を知らずに育ったが、祖父母からはその慈愛をたっぷり受けて成長した。

学問の方は、幼にして日下部伊三次（聖謨に臣事した儒学者）や安積良斎に師事し、さらに昌平齋（昌平坂学問所——幕臣の教育機関）に学んだ。語学は、箕作阮甫について、さらに蕃書調所（のちの開成所、東京大学の前身）に入って蘭語を学び、英学は中浜万次郎（ジョン万次郎）・森山多吉郎につき、さらに仏学をメルメ・ド・カシオンについて横浜語学伝習所において手ほどきを受けた。剣術は酒井良祐の指南を受けたが、あまり熱心になれなかった。

やがて太郎は安政四年（一八五七）十三歳にして元服し、十四代將軍家茂の小姓組番士となり、文久三年（一八六三）正月小納戸に進み、翌元治元年

(一八六四) 六月勤仕並寄合となり、慶応二年(一八六六) 八月幕府陸軍の歩兵頭並(大隊長格)となり、この年の十月イギリス留学の命を受けたのである。⁽³⁾

*

幕府が崩壊したとき、川路家では家産の目ぼしいものは秩父の某旧家に預けたが、それも維新のどさくさまぎれに盗難にあつて一物もなかった。徳川家の旧家臣の中には維新後、旧主に随つて駿府(静岡)に移住するものもいたが、太郎(名を改め寛堂)は多少の家産を整理し、当時急速に発展しつゝあつた横浜に赴き、そこで貿易業を始めようとした。その頃、旧幕臣にしてすでに横浜にいた者は、益田孝(一八四八〜一九三七)、明治・大正期の実業家、三井財閥の基礎を造つた)、伊東玄朴(一八〇〇〜一八七一)、幕末・維新期の蘭方医)、伊東昆斎(不詳)、田辺太一(一八三一〜一九一五、明治期の外交官)などであり、太郎はこの港町で一旗挙げようと思ひ、生糸の輸出商となつたが、相場で損をし、あまつさえ大きな借財を作つてしまつた。すべてにはわか商人の武家の商法と運に見放された結果で



若き日の川路太郎(寛堂)
渡英の際に上海で撮つたもの

もあつた。

その頃、寛堂は伊藤博文や川村純義(一八三六〜一九〇四、明治期の海軍軍人)と相識に至つた。

明治四年(一八七二)十一月、条約改正と外国事情視察のため、岩倉使節団が欧米に赴くことになり、太郎は旧知の渋沢栄一や田辺太一(外務少丞、一等書記官)らの推挙により、使節一行に三等書記官

(外務七等出仕)として随行することになった。時に太郎は二十八歳。再に官に就いたのは、事業に失敗した後のことであり、再び外国の地を踏む喜びもあり、何よりも再起を図るまたとない好機とばかり、二つ返事で応じたものらしい。岩倉使節団の随員の中には、かつてイギリス留学時代に自分の監督下にあつた林董三郎(董たかし)も二等書記官(外務七等出仕)として参加していた。

使節団が各国巡歴中、寛堂は事務一切の管掌役に関与し、重宝な人間として遇せられ、ひじょうに多忙を極めたといふ。⁽⁴⁾寛堂白筆の履歴書によると、ニューヨーク滞在中は財務出納事務を、ハーグでは土木工役などの調査等を命ぜられていたことがわかる。明治六年(一八七三)九月、寛堂は約二カ年にも及ぶ欧米巡歴の旅を終えて使節一行と共に帰国した。帰国後、残務整理員として直ちに大蔵省に出仕した。

翌明治七年(一八七四)三月、横浜出張を命ぜられ、外国人交渉の事務に従事し、また同年八月、大蔵省検査寮改正取調掛を拝命している。明治八年(一八七五)一月、公務を帯びてシャム(タイ国)に赴き、同年三月帰朝した。明治九年(一八七七)一月、大蔵権少丞に任じられ、同年二月正七位に叙せられた。寛堂は、欧米巡歴の旅から帰朝して数年経つても、官位は相変わらず六等出仕を出ることもなく、この間に外国文書課長のような椅子を与えられても、昇進の望みはなかつた。寛堂は大隈重信の知遇を受け、一時期その秘書役のような立場(5)にあつたようだが、明治十年(一八七七)一月、各省の大少丞以下廃官になつたのを機に官界から去つた。

当時、薩長の藩閥のわく外にあつた旧幕臣などには出世の見込みは薄く、また成り上がり者が多い官界に身を置くことが堪え難く思われたこともあつて、翻然悔悟して野に下つたものか。下野げやした後の寛堂は、往年の蹉跎を思つて二度と危険の多い仕事に身を投じることを避けたが、一時期「米商会所」(後の兜町の米穀取引所)の設立に一役買ひ、また英米人の法律顧問や仲裁裁判の特例実施などの仕事を多少した。また横浜税関長に推挙されたこともあつた

が、これは成らなかつた。

明治十八年（一八八五）、この年寛堂四十一歳。かれはすべてを放棄して、芝三田台町三番地に「月山学舎」といふ英学塾を開いた。寛堂は慶応義塾の福沢諭吉とは旧知であり、同義塾に入學しようとする学生の英語準備になるところから、三田にこの私塾を開いたものらしい。後年、詩人・美術評論家として一家をなす一子の川路柳虹（一八八八〜一九五九）が生まれたのは、この三田の学舎においてであつた。

やがて教育事業に足を踏み入れたことが契機として、後年の教育者としての寛堂像が出来上るのである。「月山学舎」で英語を教えたのは明治二十六年（一八九三）の夏までの約九カ年であり、この年備後（広島県東部）の福山尋常中学校（祖父聖謨在世中の老中阿部伊勢守の藩校「誠之館」、現在の福山誠之館高校）に招かれて赴任した。当時の月給は三十五円であつた。福山尋常中学校はのちに広島第二中学校と改称されたものか判然としないが、いずれにせよ福山にいたのは明治二十六年九月から同三十二年七月までの約七カ年間である。

明治三十二年（一八九九）七月、寛堂は広島第二中学校を依頼退職し、妻子を連れて淡路島の洲本中学に赴任した。福山より洲本に移つたのは、妻花子（旗本三千五百石浅野長祚——中務少輔・備前守——の五女）が結核になり、その療養のためであつたらしい。その転地療養も効なく、花子は洲本で亡くなつた。

明治三十六年（一九〇三）一月、寛堂は新設の津名三原郡組合立淡路高等女学校の初代校長に任じられ、月俸六十円を給せられる身となつた。この年寛堂五十九歳であつた。かれが洲本に住んだのは、明治三十二年七月から大正三年（一九一四）五月までの約十五カ年であり、このうち淡路高等女学校の校長職にあつたのは満十カ年である。大正三年四月をもって寛堂は同校を退職することになり、五月五日講堂において送別会が挙行され、記念として宣徳火鉢と花器（はないけ）が贈られた。



松陰女学校副校長時代
の川路寛堂
〔松陰女子学院蔵〕

寛堂は、淡路高等女学校退職と同時に神戸の松陰女学校（明治二十五年「一八九二」創立の英国聖公会系のミッションスクール、現在の松陰女子学院）に副校長として迎えられ、そこで大正十一年（一九二二）まで勤務し、この年老齢のため退職した。時に寛堂七十八歳であった。晩年、寛堂は神戸市真合町ノ内熊内池ノ端に住み、悠悠自適の生活を送り、時折、東の教会（日本聖公会⁽⁹⁾）に行っていたようである。が、昭和二年（一九二七）二月五日、八十四年の生涯を閉じた。遺骨は現在多摩墓地の川路家の墓に葬られている⁽¹⁰⁾。

寛堂は聖謨を祖父とする名だたる幕臣の家に生まれたが、その生涯を大観すると、どちらかといえば不遇であったといえる。旧幕臣の中には、維新後新政府に仕え巧みに世渡りし、高位高官にまでなった者も少なからずいたが、寛堂は薩長閥に取り入ることや権門にこびることはせず、独往の人生を歩んだといえる。一つには元幕臣としての矜持⁽¹¹⁾がかれをそのような仕向けたともいえるが、「および人間社会は、優勝劣敗、適者は存し不適者は亡ぶ⁽¹¹⁾」を身をもって体験した結果、自分は人生の失敗者であると悟り、すべてを放棄し、一から出直す気で士族の族籍を捨て「平民」となった。しかし、野に下ったところで、日々の糧を何かに求めて生きてゆかねばならぬ。かれは考えあぐねた末、私設の学舎を開き、教師として生きようとしたのであ

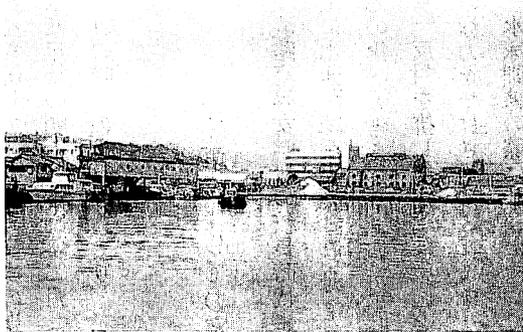
る。

生前、寛堂は「月山漫筆」（自伝）「英航日録」（自筆のイギリス留学記）「暹羅^{シヤム}記行・紀略」（タイ国出張の記録）などを著したが、「英航日録」を除くと他は未刊である。これらの稿本は現在、残念ながら子孫宅に無く、目下行方不明である。ところで寛堂は福山の中学教師時代に浩翰な祖父聖謨の伝記『川路聖謨之生涯』（世界文庫、明治三十六年十月刊）の筆を執っている。聖謨の性行事蹟について書かれたものの中には誤記無しとはいえず、誤まり伝わるのは祖父の本意にあらざると思い、公務の余暇に、家に伝わる聖謨自筆の記録等を基に、また聖謨の直話その他の書籍を参酌して、ありのままの聖謨像を描うとしたものである。明治三十年（一八九七）四月、稿を起し、完成したのは四年後の明治三十四年二月（一九〇一）二月のことであった。これは寛堂のひつ生^{ヒツウマ}の業であると同時に公刊されたかれの唯一の単行本であり、名著としても知られている。

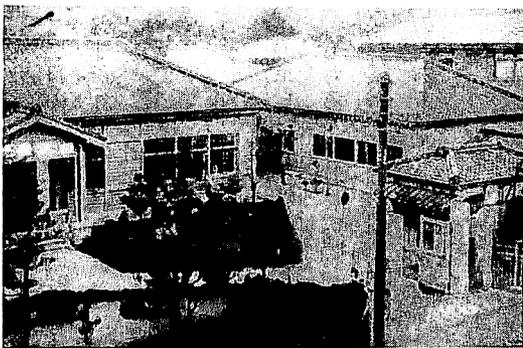
○教育者としての寛堂

淡路高等女学校の校長時代に寛堂は数々のエピソードを残している。明治三十八年（一九〇五）の夏、同校の女生に水泳訓練が実施されることになった。もちろんそれを提唱したのは川路校長である。物静かであるのが婦徳の第一と考えられていた当時、水泳実施は破天荒の試みであった。しかし、川路校長は「かたく自ら信ずる所あり」反対を排して、訓練実施を断行したのである。水泳訓練の目的は、身心鍛練と不時の際に溺死をまぬがれるだけの泳力をつけさせることにあった。

水泳訓練の際に問題になったのは、服装（海水着）のことである。当時、女性が人前で素膚を見せることは思いも



現在の淡路洲本港 [筆者撮影]



淡路高等女学校の建物 [洲本高等学校蔵]

名だけは泳げなかったが、残り全員が五メートル以上泳げるようになった。一時は物議をかもした川路校長の水泳訓練も無事終了し、のちには生徒たちにも好評であった。寛堂が淡路高女の生徒たち全員にあえて水泳を学ばせたのは、イギリス留学中に英国婦人が泳いでいる姿を実見したことがあり、ましてや淡路は四方海にかこまれ、他国に行くには船に乗らねばならず、海難に遭った際に溺死から身を守るための有効な手段と考えたからであろう。ここに川路校長の進歩的な教育方針の一端が見られる。

寛堂は東京より西国に向うとき、英語教師として赴任したものであるが、淡路高女では修身と英語を担当した。ま

かけぬことである。そのため川路校長は、イギリスにいる知人に海水着について問い合わせ、当時ヨーロッパではやっていない型をとり寄せ、海水着と同色のズロース（水泳パンツ）などを作らせた。水泳教師については、旧藩士の中から五十歳以上の年配者を二名、漁師の妻女で水泳に熟達せるもの三名ほど雇い入れた。水泳の実施期間は、七月六日から同月二十三日までの十八日間で、毎日午後四時から五時までの一時間これに当てられたという⁽¹²⁾。参加者は百二十九名。このうち三



明治30年代の淡路高等女学校の海水着
〔洲本高等学校蔵〕

た同校に移る前に教鞭をとった県立洲本中学校（現在の洲本高校）でも、やはり英語を教えている。

明治から昭和期にかけての著名な経済学者・大内兵衛（一八八八〜一九八〇、東大教授を経て法政大総長、学士院会員）は、明治三十四年（一九〇一）四月、この旧制洲本中学校に第五期生として入学した。じつは大内は中学二年生のとき寛堂から英語を学んでいるのである。当時、寛堂は五十七歳であった。

川路君（柳虹のこと——引用者）のおとうさんは寛堂といい、少年のころ菊池大麓（一八五五〜一九一七、明治期の数学者・教育行政家・東大総長）などと一緒に日本最初の留学生としてロンドンに学んだが、英語は日本語の如くに話した。短身ではあったが白皙（肌の白い——引用者）で美しい髪をたくわえ、ふちなしの眼鏡をかけた美丈夫（顔や姿の美しい男——引用者）であった。私は、この先生から中学二年のときに、パーレーの万国史を習った。Though Greece is one of

the most famous countries in the globe と云う、最初のパラグラフから、先生は朗々としてよみはじめ、アゼンス（アテネ——引用者）やスパルタの英雄物語を面白く講じてくれた。ことに先生の発音がイギリス人らしいのがひどくエキゾチックであった。と同時に understand という字をオンドルスタンドというが如く、またロンドンをランダンというが如くに発音するのが子供心に奇妙でならなかった。先生は漢詩も上手であり、字もうまかった。

大内が語っているように、今日残されている晩年の写真

を見ると寛堂は大きな人ではなく、小柄な人の印象を受ける。イギリス留学中は、ロンドンのランカスターゲイト十番地のW・V・ロイド師宅に住み、エドワード・モルトビーという教師に師事し、他の留学生らと共に英語や数学を学んだのである。が、寛堂の自筆の履歴書によると、かれは慶応三年正月から明治元年六月までモルトビーより「英文学」を学んだと書いている。

このモルトビーという先生は、ロンドンの東百キロほどの所にあるマーゲートの住人で、ロンドンまで日本人のために出稽古に来たものである。寛堂はこの先生から純正英語をたたき込まれたものであろう。そのため寛堂の発音には、プリティッシュ・アクセントが感じられたのであろう。

また武士階級出身の者は国漢の素養があるのがふつうだが、寛堂は年少の頃、第一級の師について学んだだけに国学・漢学の知識は深く、相当なものであった。また文字も、今日残っている書簡を見ると、いずれも見事なお家流で書かれており、大内がいうように能書家であったことがわかる。

大内は洲本中学では、寛堂の息子柳虹や同校の国漢の教師・高木六郎の長男市之助（のち東京帝大の国文科を出て、九州大学教授）と同級であり、かつ仲よしでもあった。が、後年の国文学者・高木市之助は三人で田村文石のもとに和歌を習ひに行つた経緯や洲本時代の寛堂夫妻について次のように語っている。

川路柳虹君のお父さんは川路寛堂といつて、江戸の有名な学者で幕府につかえていた川路聖謨の孫かなにかで、「川路聖謨の生涯」という大きな本を書いています。洲本では英語の先生をしておられました。川路君のお母さんもやっぱり歌人で、もしかするとこのお母さんが川路君に田村先生（国学者・田村文石——引用者）に習いに行けとすすめて、川路君が私のところへもつて来て、大内君も一緒に加わつたというのが一番ほんとうかも知れない。私の父が遍歴する話（山形へ転任した

こと——引用者）は前に言った通りですが、川路君のお父さんの場合だってそうなんです。生粋の江戸ッ子が淡路島の船着場（洲本のこと——引用者）で暮らすなんて、今から考えると、その昔都人が島流しに逢ったといった恰好で、お母さんもほんとうに上品な江戸ッ子で、洲本なんかでは惜しいような言葉を使って、年増ながらなかなかの美人で、錦絵に出て来る大奥の御殿女中といったところでした（高木市之助『国文学五十年』¹⁵）。

江戸で生まれ育った人間が、わざわざ淡路島にやって来たことで、子供心に寛堂夫妻はまるで流人のように写ったものであろう。

高木は寛堂の妻花子について貴重な証言を残しているが、花子の面差しには、老いたりといえども往年の美人を思わせるものがあつたものか。けれど「佳人薄命」といった言葉があるように、花子はすでに述べたようにこの旧城下町で五十四歳を一期に亡くなったのである。¹⁶

花子の母は、大名家の出身である。出羽国亀田藩主岩城隆喜を父として生まれ、長じて旗本浅野長祚に嫁し、花子を生んだのである。長祚は書画を愛し、京都・江戸町奉行を歴任した能吏であつたという。花子と太郎（寛堂）との縁談が持ち上つたのは、文久元年（一八六一）春四月頃のことであるらしい。御小姓組山本新十郎が仲人をしたが、浅野家の家禄は三千五百石、川路家は五百石であつたから、家格の不釣合いを理由に、聖護は婚姻に反対であつた。が、結局は話がまとまり、文久三年九月、太郎（二十歳）と花子は華しよくの典をあげた。¹⁷この兩人は——いわゆる琴瑟相和す——仲むつまじい夫婦であつたようだ。

○寛堂の処生訓

教育者として観た場合の寛堂は、旧幣な人である。年少より儒学教育を受け、長じて洋学にふれたが、その人生観・教育観の根幹を成すものはやはり儒学思想であった。教育の基本理念、人間として守るべき徳目、人生の指箴（指針となるいましめ）の基礎は、すべて教育勅語の中に集約されていると考えたようである。寛堂が淡路高等女学校の校長時代に行った「卒業式の訓示」（大正二年三月）の中に、かれの人生観や教育観が如実に現れているように思われる。

先ず「恩」（めぐみ）について、寛堂は仏語の四恩（衆生がこの世で受ける四つの恩）をもじって、「まず第一に君国の恩、次に父母の恩、次に淡路当局者の恩、教師の恩」を心に銘記せよ、といい、中等教育を受ける機会を与えてくれた父母の恩愛や師恩にふれて次のように云っている。

——教育は人を人となす大切なものですから、まず教育についていえば、明治維新の前は、女子に教育を与えるということなく、むしろ女子は無学ならしめんとした方針のようでした。しかるに明治の御代に遭遇して、諸嬢は男子と大差なく、中等教育を受けるに至ったのです。実にその御恩大なりと云うべし。

また諸嬢の父母は、経費をも厭わず、諸嬢に教育を与へんとて、この校に送ったのです。その恩、申すまでもなし。また淡路にこの学校あればこそ、諸嬢が遠く笈を負うに及ばずして（負^さ笈^お）——遠く離れた地に行く意——引用者、坐ながら中等の教育を受けるを得たれ。されば当校を創立し、これを維持する経営者の恩もまた大ならずや。また初等の教育たる小学の教師を始めとし、すべて教師に受けたる恩も大なりと云うべきにあらずや。



淡路高等女学校校長時代の寛堂と
教え子。卒業式のとき撮ったもの
〔洲本高等学校蔵〕

人生に有為転変はつきものである。人生航路には嵐もあれば、なぎもあるが、逆境に遭った際に堅忍不拔の精神と勇気をもって艱難に耐え困難に打ち勝つようにいましめている。

——一步を転じて申しますれば、今や諸嬢は高等普通教育を了りたる人ゆえ、これよりいずれの途にせよ、世間という荒波の中に出ることである。されば忍耐も勇気もますます実施に経験すべき時機に到来したのだ。これを約言すれば、すなわち人間社会の辛苦を嘗むべき（味わう意——引用者）時節に成つたのです。およそ人間社会は、優勝劣敗、適者は存し不適者は亡ぶ。と、いう通則を実行する場所なのである。

かつまた、たとえ、優勝者といえども、いつも順境に在るのみというわけにはいかぬ。ずいぶん不幸にも遭遇することが多いのだ。古来哲人が、人生の行路難を歌うたのも、実故あると云うべしです。さればいかにして楽しくかゝる行路の困難なる世を送るべきか、ないしはこの世を悲観して哀れに生を送るべきでしょうか。近クラボックス（不詳——引用者）という人の言に、「人生とはただ生きておる、という意味ではなくて、よく生活することです」と云いました。このよく生活するというのは、心胸快活、古人のいう仰いで天に愧じず、俯して地に愧じず（仰不レ愧ニ於天一、俯不レ作ニ於人一「ふぎようてんちにはじず」「孟子・尽心」——公明正大のたとえ——引用者）と、いうのです。もとより奢侈贅沢に生活するということではない。

幕末から維新期にかけての激動の時代を生き抜いて来た寛堂の実体験から生まれたのが、今引いた言葉そのものであろう。

人は困苦をなめておるとき、どうすれば精神的な喜びを得られるか。つまりそれは各人の心の持ち方次第であると説いている。

——また歩を転じて考えますれば、この荒波の世の中に辛苦を絶えざる時において、いかにして心胸の快活を得らるゝでしようか。これ只に諸嬢の心がけ次第に在るのだ。古の賢哲（才知がすぐれた人——引用者）も「禍福（わざわいと幸い——引用者）己より出でざるものなし」といい、また西哲も「己れが幸福を得ざることあらば、その過失は己れの身にあり」といいました。またラスキン（一八一九—一九〇〇）、イギリスの批評家——引用者）も「人の心次第で、天地間の万籟（あらゆる物音——引用者）をして、ことごとく美なる音楽のごとく聞かしむることを得る」といいました。（中略）

かかるときに当り、満胸の勇氣をもて、百般の誘惑と戦いて、これを退け、またいかなる逆境に立つとも、その困難は、非常の耐忍をもてこれに抵抗し、困難に敗北しては決してならぬ。されば奮闘をもて、千万の困難に打ち勝てば、すなわち幸福という戦利品を得ること信じて疑うべきでない。

文明が開け、世の中が進むにつれて人間はぜいたくになつて来たが、寛堂はともすれば奢侈に流れがちな世の弊風、驕慢（おごりたかぶり）、日本婦人がもつべき気概（気骨）と堪忍について次のように述べている。

——終りに臨んで、なお一言せんと思うは、世の文明に赴くに随い、奢侈の風もまた進む傾きがある。然していずれの国に

おいても、奢侈と女子とは、大いに関係あるようです。戒めよ、諸嬢よ。「一朝奢侈に陥らば、永久その人を汚す」とペーコン（一五六一〜一六二六、イギリスの哲学者——引用者）もいいました。

今日諸嬢は卒業生といえる名称を得られましたから、もうこれでよいという驕漫心の、もしも出るか、あるいはまた少しばかりの学識を振り廻して、誇り顔するようなことあれば、これと共に奢侈心が共に起り、誘惑をたくましくする有形無形の内外の悪魔につけ込まれ、ついに墮落生となるのである。（中略）わが大和民族の女子には、古より能く多大の艱難を忍んで、君のため、夫のため、親のため、その身を犠牲にせしものも少なくない。願くは諸嬢よ、古来の賢婦烈女に愧じず、よく良妻の本性を実現し、世の困苦に打ち勝ち、もつて徳器を成就し、人格の完成を期せんことを。

寛堂が淡路島にいたのは十年と三カ月であり、とくに淡路高女の校長のとき二百余名の卒業生を世に送った。毎年、卒業式るとき訓辞を述べたが、それを一言に要約すれば「忍耐」ということであつた。寛堂は淡路を去り、神戸に赴いたのちも、慈しみ育てた子（卒業生）に対してはいつまでも愛情を注いだのである。曰く。

——小生はたとえ淡路高女校の職儀を去りたるも、なお何の変ることなく、常に諸君を我が娘にひとしく思い、諸君の幸福を聞けばこれを喜び、これに反せば憂に堪えざるべし。よつて何事にまれ、もし小生相応のことにて、諸君のためにつくすべきことあるときは、微力のあらん限り喜んでこれを尽すべきこと勿論ですから、御遠慮なく御もうし越あらんことを希望します。

終りに臨んで、切に願くは、諸君つねに精神の修養と共に、身体の運動を怠らずして、心身の健康を保たれんことを。小生つねに諸君の健全と幸福を祈る。

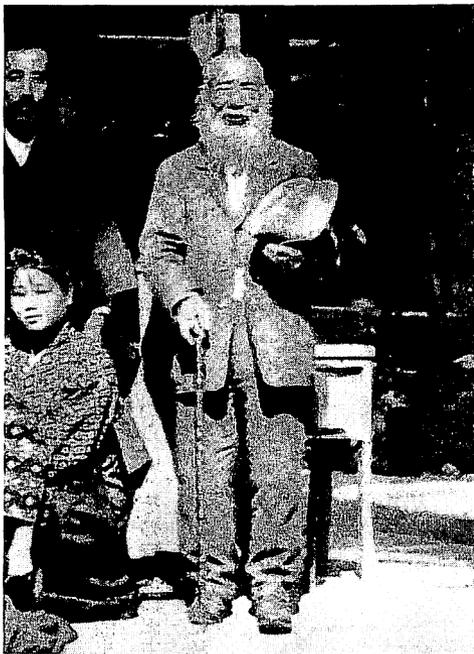
○神戸松蔭女学校における寛堂

寛堂は、晩年の約九年間を神戸市中山手の松蔭女学校の副校長を勤めた。その寛堂に修身・東洋史・西洋史を教わった卒業生が今も健在である。日下初子^{くさか}さん八十七歳がその人である。日下さんは旧姓を喜田といい、兵庫県三原郡三原町の出身で、明治三十六年（一九〇三）六月十七日、医師喜田忠次郎の子として生まれ、大正五年（一九一六）十三歳のとき、女学校進学のため故郷の淡路をあとに神戸にやって来た。そして同年春このミッシヨンスクールに入学したのである。父母はもともと初子さんを医学校に進ませ医師にするのが念願であつたらしい。彼女は松蔭を出たのち奈良女子高等師範学校に進み、同校を卒業した。大正十一年（一九二二）から同十五年（一九二六）年までの約四カ年間、初子さんは川路副校長と入れ代わりに第九代校長に就任した浅野勇の事務手伝いのようなことをやり、そののち判事日下氏のもとに嫁した。

初子さんが松蔭女学校に入学した大正五年の入学者は四十名。無試験入学で、五年生が十名ほどいたという。当時の第八代校長はミス・ヒューズといい、毎朝礼拝堂（？）で出席が取られたあと、一同讚美歌をうたつた。川路校長ももちろん出席していた。何かの折に、ミス・ヒューズがそばの寛堂に英語で何かいうと、かれは「オーイエス。オーイエス。イエス……」と答えていたという。それが何ともおかしく思われたので女学生たちがぐくすくす笑うと、あとでミス・ヒューズから「なぜ、おかしいのか？」としかられた。

初子さんは高学年（四、五年生）のとき、初めて寛堂に教わつた。が、すでに当時から七十余年も経っており、寛堂の印象は稀薄であるという。寛堂はどのような先生であつたか尋ねると、

——体格の小さな人で、かわいいサンタのおじいさん。



松陰女学校副校長時代の
川路寛堂
〔日下初子氏蔵〕

のような感じがしたという。
筆者はイギリス留学中のことが聞き出したかったが、寛堂はそれについては何も語らなかつたらしい。時折、教科書を忘れて教場に出てくる女学生がいると、寛堂はいつも、
——教科書を忘れるは、兵隊が鉄砲を忘れるようなものである。
といった。

このエピソードは、寛堂のユーモラスな一面をよく物語っているように思われる。寛堂は洲本時代に妻花子を失つたのち、その付添婦をしていた吉見サダ（三原郡三原町の出身、人形遣いの妹）を後妻とした。この結婚は土地の人々、とくに町長や村長などから非難を浴びたらしい。ちなみに菊川兼男氏（元三原高等学校校長、郷土史家）の爺父（長五郎）は当時、三原郡湊村の村長であつた。

寛堂の家は神戸市熊内通りにあり、二階の二間を学生下宿に当て、淡路出身の女学生をよく下宿させていたらしい。初子さんも寛堂の家に遊びにいった折、後妻のサダ（クリスティアンに改宗）から「うちに下宿しなさい」と云われたことがあり、また寛堂の息子柳虹（当時、美校生）ともトランプなどやっ

て遊んだ想い出をもっている。

幕臣時代と晩年の寛堂の写真をよく見比べてみると、概ね風貌は変わらず、よわい齡を重ねるにつれて、ますます品性は陶冶され、せんざし村夫子然として来た印象を抱かされる。寛堂の前半生は、波らんに富んだものであり決してしあわせであったとは思えぬが、教育者に転身してからは、その職務に忠実に、教育に無比の愛を注ぎ、晩節を汚すことなく、穏やかな生涯を終えたように思える。本稿を泉下の寛堂先生に捧ぐ。――

次に太郎（寛堂）の伝記資料を次に掲げる。ルビ及び（ ）内の注は引用者による。

〔史料〕

川路太郎

高五百石武蔵下野しちごけ 本国生国共武蔵

安政(二八五六)三辰年六月十日従部屋住被召出兩御番之内江御番入被仰付御小姓組酒井対馬守組江入仙石右近組之節同六未年八月二十七日祖父左衛門尉思召有之御役御免家督無相違被下置おおせつけられ

柴田能登守組之節 文久三亥年正月二十二日御小納戸被仰付同年二月六日布衣被仰付元治元子年六月二十三日勤仕(二八六三)

並寄合被仰付慶応二寅年八月二十七日歩兵頭並被仰付候。(二八六六)

次に掲げるのは寛堂直筆の履歴書である。淡路高等女学校の用箋（八枚）に毛筆で書いたもので、現在兵庫県立洲

本高等学校に所蔵されている。

履 歴 書

川 路 寛 堂

一 族 籍 広島県平民

一 原 籍 広島県備後国深安郡深津村百六番邸

一 現住所 兵庫県津名郡洲本町ノ内汐見町一番地

一 生年月日 弘化元年十二月廿一日

一 卒業証書免許状
無之な

一 学 業 学校又ハ教師
年 月 日 学科程度

自 慶応三年正月

至 明治元年六月

英文学

英国倫動文学士

モルトベール

一 職業

年月日

職務俸給

官庁

明治四年十月廿二日

特命全權大使欧米各国へ被差遣候
ニ付三等書記官トシテ随行被仰付

太政官

明治四年十月廿九日

外務省七等出仕ヲ拜命ス

太政官

明治四年十一月日不詳

特命全權大使并ニ副使ニ從ヒ横浜出帆先
ツ米國ニ向ヒ欧米巡回ノ途ニ上レリ

明治五年六月廿五日

財政出納事務取調トシテ紐育府滞在被
仰付

特命全權大使

明治五年八月日不詳

特命全權大使并ニ副使ニ從ヒ米國慕斯
敦港ヲ発シ英國ニ渡航セリ

明治五年八月十九日

大蔵省七等出仕ヲ拜命ス

太政官

明治五年十月三日

公務執掌ノ際格別勉勵候ニ付為御手
当毎月墨銀五十元ツヽ加賜セラル

明治六年一月十日

土木工役視察トシテ和蘭國滞在被仰付

特命全權大使

明治六年二月日不詳

独逸國仏蘭克堡ニ於テ又特命全權大使
ノ一行ニ列隨シ伊太利國ノ各市府其他澳
太利瑞西ノ各地ヲ巡回シ支那地方ヲ經テ同

一行ニ列隨シ伊太利國ノ各市府其他澳
太利瑞西ノ各地ヲ巡回シ支那地方ヲ經テ同

明治六年九月

年九月日不詳帰朝ス

帰朝以後特命全權大使会計残務整

理員ニ列シ大蔵省ニ於テ之ニ従事ス

横浜出張被仰付外國人交渉ノ事務ニ従事

シ一ヶ月ノ後之ヲ結了シ本省に帰ル

明治七年八月十五日

大蔵省検査寮改正取調掛被仰付

明治八年一月十八日

御用有之暹羅国へ被差遣旨ノ命ヲ拜

シ翌日横浜出帆香港馬尼刺新加坡ヲ経テ

暹羅国盤谷府ニ至リ公務完了ノ後同年三

月日不詳帰朝ス

明治八年九月廿三日

翻訳御用専務被仰付

明治八年十一月二日

特命全權大使へ随行欧米各国巡回中拝借

金参百円特別ノ訳ヲ以テ返納テ及バサル旨ノ

特典ヲ蒙ル

明治九年一月十二日

大蔵 権少(六位の官?)
丞ニ任セララル

明治九年二月二十日

正七位ニ叙セララル

明治十年一月十一日

各省大少丞以下廃官ニ付罷免

明治廿六年八月十五日

広島県福山尋常中学校教員雇ヲ命セララル

明治廿六年九月十日

更ニ広島県ヨリ福山尋常中学校教師ヲ嘱

託サル但月俸金参拾五円給与サル

大蔵省

太政官

大蔵省

太政官

太政大臣従一位三条実美宣

太政大臣従一位三条実美宣

広島県福山尋常中学校

広島県

明治廿八年九月十九日

月俸金四拾円ニ増給セラル

広島県

明治三十二年六月五日

月俸金四拾五円ニ増給セラル

広島県

明治三十二年七月六日

依願ねがいに広島県第二中学校教師ノ嘱託ヲ解ル

広島県

明治三十二年七月六日

兵庫県洲本中学校教諭心得ヲ命セラル但月

俸金四拾参円給与サル

兵庫県

明治三十三年一月廿四日

月俸金五拾円増給サル

兵庫県

明治三十四年六月三十日

月俸金五拾五円ニ増給セラル

兵庫県

明治三十六年一月三十一日

兵庫県津名郡三原郡組合立淡路高等女

兵庫県

学校長ニ任セラル但月俸金六十円給典

兵庫県

明治三十六年五月十四日

津名郡三原郡組合立淡路高等女学校長

内閣総理大臣従二位勲一等

ニ任セラル

功三級伯爵桂太郎宣

明治三十六年五月十四日

拾貳級俸(七百円) 下賜セラル

兵庫県

明治三十七年四月十四日

拾壹級俸(八百円) 下賜セラル

兵庫県

一 賞罰

明治十年二月三日暹羅シヤム国物産並米ワメリクインディアン 国土人ノ所用品博物館ニ献納

候付其賞トシテ東京府ヨリ銀盃一個下賜セラル

一 身上異動

元来旧幕府ノ臣ナリシガ明治元年維新ノ際藩地タル静

岡ニ赴カズ民間ニ下テ平民トナリ本籍ヲ東京府ニ定メタリ

爾後明治三十一年都合アリテ現今在籍地広島二籍ヲ
移シタリ

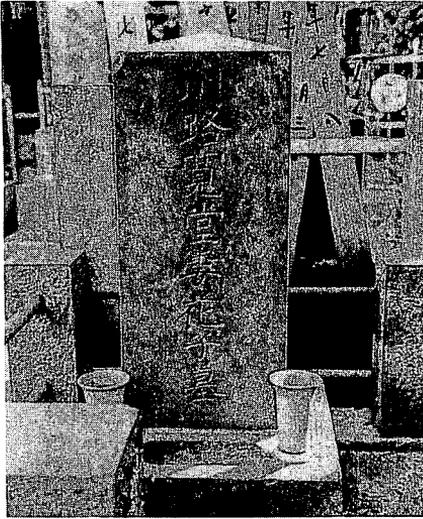
〔追記〕

一 昨年の夏期休暇中、筆者は慶応二年（一八六六）にイギリスに送られた幕府留学生十四名について小論を書いた。一行の取締（学生監督）の一人であったのが、幕末期の有名な幕政家川路聖謨の嫡孫・川路太郎（寛堂）である。太郎の同輩ならびに監督下にあつた留學生のうち、中村敬輔（正直）・外山拾八（正一）・箕作大六（のちの菊地大麓）・林董三郎（董）・市川森三郎（のちの平岡盛三郎）らは、維新後林のように官途についたものを除き、欧米に再留学し、帰国後、欧化主義のもとでそれぞれ順風満帆の人生を歩み、外交官や官僚学者となり、多くはやがて華族に列した。が、ひとり太郎は、およそ出世とは無縁の人生を送り、中等学校の一教師としてその生涯を閉じた。

太郎は若き日にロンドンに留学はしたものの大学には入学せず、個人教師について学んだだけで、とくに資格・肩書といったものがなかったために官途についても出世の見込みは無く、ましてや教育の最高機関である大学に招聘されることもなかったのである。幕府崩壊後、旧旗本や御家人らは百八十度生活を転換せざるを得なくなったが、筆者はその一典型として元幕臣川路太郎の維新後の生きざまに非常に興味を覚えるのである。旧稿では維新後の経歴を略記したにすぎなかったが、今回大方の御協力を得て太郎の生涯の空白部分をだいぶ埋めることができた。最後に本稿を草する上で、尼崎市大庄西町在任の日下初子氏、神戸市の松蔭女子学院校長磯由美子氏、兵庫県三原郡西淡町湊里在中の郷土史家で元三原高校校長の菊川兼男氏、兵庫県立洲本高等学校教諭武田信一氏、都下町田市在任の川路克子氏、宮内庁書陵部に勤務する川田貞夫氏、安立院住職畑田良順氏等のお世話になりました。記して感謝を表します。

注

- (1) The Japan Times Overland Mail (1868・8・22 付) の記事による。
- (2) 『自助的人中村正直伝』の五八頁。
物典型人
- (3) 川路聖謨著 『東洋金鴻英國留學生への通信』の解説を参照。
川田貞夫校注
- (4) 川路柳虹『黒船記』の一五六頁。
- (5) 同右。
- (6) 『黒船記』の一五七〜八頁。
- (7) 菊川兼男氏の談話。
- (8) 『淡交会誌』(第四号、大正三年二月刊) 四頁。
- (9) 日下初子氏の談話。
- (10) 川路克子氏の談話。
- (11) 『淡交会誌』(第四号) に掲載された「卒業式の訓示」(寛堂) より。
- (12) 『洲本市史』八四七頁〜八五〇頁。
- (13) Peter Parley's Universal History on the basis of Geography (B 5 版、七〇〇頁) のこと。
- (14) 『黒船記』の「序」より引用。
- (15) 同書の二二頁〜二二頁。
- (16) 花子の没年・戒名等に関しては、台東区谷中の安立院あんりつゐんの過去帳に、



谷中安立院にある川路寛堂の妻花子の墓
〔筆者撮影〕

明治三十六年五月二十二日

芳光院殿花仙清英大姉

川路寛堂ノ妻

川路花子

淡路ノ国ニテ死

とある。

また花子の墓は、本堂の裏手の墓地にあり、墓石の表面に、

川路寛堂妻花子墓

とあり、その裏には

明治三十六年五月廿二日

淡路国洲本ニ於テ病没ス遺言

ニ依リ火葬ノ上遺骨ヲコ、ニ

埋ム

と刻まれている。

安立院は花子の生家浅野家の菩提寺であり、花子

の墓は浅野家の墓と並んでいる。

なお、寛堂夫婦には一子柳虹以外に、娘が二人いたが、いずれも生後まもなく亡くなった。

(17) 注の(3)の川田貞夫氏の解説による。

(18) 同右。

(19) 『淡交会誌』(第五号)に寄せた寛堂の書簡(大正二年十二月一日付)。

史料及び参考文献

川路寛堂自筆履歴書(墨書) [兵庫県立洲本高等学校蔵]

兵庫県津名郡三原郡組合立淡路高等学校学則(二枚) [兵庫県立洲本高等学校蔵]

『淡交会誌第五号』(淡路高等学校内淡交会、大正三年二月刊) [兵庫県立洲本高等学校蔵]

菊川兼男『昔しも恋し』——泉貴志子先生の生涯——(小冊子、私家本) 昭和五十六年十月刊 [松蔭女子学院蔵]

川路寛堂に関する談話筆記(郷土史家・菊川兼男氏が松蔭女子学院の磯校長に語ったもの) [松蔭女子学院蔵]

松蔭女子学院所蔵の卒業生(大正期)の写真数葉

日下初子氏(松蔭高等学校第二回卒業生)が修学旅行(大正期)の際に撮った写真一葉 [同氏所蔵]

日下初子『喜田忠次郎のこと』(ナガオカ印刷、昭和五十七年十一月刊)

松蔭女子学院九十周年記念誌『愛と自由と』(松蔭女子学院九十周年記念誌編集委員会、昭和五十七年九月刊)

新見貫次『淡路史』(のじぎく文庫、昭和四十五年一月刊)

和田邦平監修『兵庫のふるさと散歩』(二十一世紀ひょうご創造協会、昭和五十三年三月刊)

洲本市史編纂委員会『洲本市史』(洲本市役所、昭和四十九年十月刊)

兵庫県立洲本高等学校編『新・洲高物語』(毎日新聞淡路支局、昭和六十二年三月刊)

- 川路柳虹『黒船記』（法政大学出版局、昭和二十八年七月刊）
- 川路聖謨著 川田貞夫注『東洋金鴻 英国留学生への通信』（平凡社、昭和五十三年十一月刊）
- 川路寛堂編述『川路聖謨之生涯』（世界文庫、明治三十六年十月刊）
- 高木市之助『国文学五十年』（岩波書店、昭和四十二年一月刊）
- 宮永孝『幕府イギリス留学生上・下』（『社会労働研究』第三十六卷・第四号、平成二年三月刊）

A Brief Life of Tarō (Kandō) Kawaji

—A student sent to England in the last days
of the Tokugawa government.

Tarō Kawaji was born on 21 December of the first year of Kōka (i. e. 28 January, 1845) as the eldest son of Akitsune Kawaji, who died at the early age of twenty-one. As a child Tarō was brought up by his uncle, Kionao Inoue (1809-1867), the Gaikoku-bugyo, or chief of the Foreign Affairs Agency, till he was eight. Then he returned to the Kawajis, where his grandfather, Toshiakira Kawaji (1801-1868), the Machi-bugyo (Governor) of Osaka and Nara city and later the Kanjo-bugyo or Chief of the Treasury Bureau, took care of him. Taro, when young, studied under the Confucian scholars, Isaji Kusakabe and Gonsai Asaka, and later entered the Shōheiko, the educational institution of the Bakufu. He first studied Dutch at the Bansho-shirabe-dokoro (the place for the study of Barbarian's books), and then learned English under Manjiro Nakahama (also known as John Mung) and Takichirō Moriyama, a famous Dutch interpreter. Taro also, was a student of the Yokohama Gogaku Denshujo (École Franco-japonais in Yokohama).

At the age of thirteen, Tarō celebrated his coming of age and waited on Iyemochi Tokugawa (1846-1866), the fourteenth Shōgun. In the first month of the third year of Bunkyu (1863), he was promoted to Konando-shu, young samurai that served in the Shōgun's palace (Edo Castle) and became Yoriai, a high official belonging to the Council of the Shōgun, in the 6th month of the first year of Genji (i.e. July 1864). In the 8th month of the second year of Keio (i. e. September 1866), Taro became Hoheigashira-nami (commanding officer of the Bakufu's infantry or lieutenant colonel) and in the October of this year, he was ordered to study in Great Britain with thirteen other students. The students, however, were forced to return home after staying in England only about a year and a half because

of the Meiji revolution. They finally arrived in Yokohama on the 25th of the 6th month of the fourth year of Keio (i.e. 13 August, 1868).

The sudden collapse of the Tokugawa government threw the vassals of the Shōgun into great misery, each having to seek a new livelihood in different ways. Tarō assumed the new name of Kandō after the Meiji Restoration and moved to Yokohama where he sought to make his fortune by being a raw-silk merchant. But he failed in this speculation and incurred many debts. In the 11th month of the fourth year of Meiji (i.e. December 1871), when the Iwakura mission started on their tour of inspection in America and Europe, Kando was, on the recommendation of Eiichi Shibusawa and Yasukazu Tanabe, requested to go along with the mission as their secretary. Among the party he found many of his old acquaintances from the Shōgunate era. It was in the September of the sixth year of Meiji (1873) that the Iwakura mission returned home after touring through various countries in Europe and America for about two years.

Kandō, returning home, entered the service of the Finance Ministry as a lower grade officer of the new government but there was no hope of his promotion for many years. In the first month of the tenth year of Meiji (i. e. January 1877) he left the official world and bore a part in establishing the Rice Exchange and also acted as a legal advisor for the English and the Americans for a while. He was in the meantime recommended for a post as director of the Yokohama Customhouse, however, this was a remote possibility. In the eighteenth year of Meiji (1885) Kandō was forty one years old of age. He abandoned everything and established a private institute called "the Tsukiyama Gakusha" for the study of English at Mita in Tokyo. He taught English here till the summer of the twenty-sixth year of Meiji (1893) for about nine years, when he was invited to teach English at "Seishikan" (Fukuyama Junjō Chūgaku), a middle school in Fukuyama, Hiroshima prefecture. He taught English from the summer of 1893 till July 1899 (the thirty-second year of Meiji) at the school, but he retired at his own request soon afterward.

Shortly after his retirement Kandō proceeded to Sumoto in Awaji-shima island to be a teacher of English at Sumoto middle

school, bringing his wife and a son with him. It is said that the symptoms of tuberculosis in his wife, Hanako, who was a daughter of Nagayoshi Asano, a direct high vassal of the Shōgun, made Kando decide to move to Awaji-shima island for a change of air for her health. The change of air, however, was ineffectual for her incurable disease. She died on 22 May 1903 (the thirty-sixth year of Meiji) in Sumoto at the age of fifty four. She lies in her tomb erected by Kandō at Anryū-in (temple), Yanaka, Tokyo.

In January 1903 (the thirty-sixth year of Meiji) Kando was appointed the first headmaster of the newly-established girls' high school called "Tsuna Miharagun Kumiairitsu Awaji Kōto Jogakko". He was fifty-nine years old then. Kandō served in this school for about ten years but in April 1914 (the third year of Taisho) he resigned and was welcomed as a deputy principal of the "Shōin girls' highschool run by the Anglican Church in Kobe city. He taught ethics and history till 1922 (the eleventh year of Taisho) when he resigned on the ground of advanced age. He was seventy years old then. On 5 February 1927 (the second year of Shōwa) he ended his days at the age of eighty-four and his ashes were laid in the grave of Kawajis in the Tamabochi cemetery. Kandō, in his closing years, wrote a voluminous book titled "A life of Toshiakira Kawaji" (Kawaji Toshiakira no shōgai) which had a high reputation.

The author of this article has tried to describe his life in detail and to convey his personality as a school teacher on the basis of a newly-discovered personal history written by him as well as a first-hand account by his former student at Shōin girls' highschool. This paper is dedicated to Kawaji Kandō sensei who lived in obscurity all his life as an unknown but learned secondary school teacher.

T. Miyanaga

Tokyo, 30 August, 1990.